

自由間接話法研究の新成果：申丹著『叙述学与小説 文体学研究』

中里見，敬
九州大学大学院言語文化研究院：助教授：中国文学

<http://hdl.handle.net/2324/6458>

出版情報：東方. 232, pp.34-37, 2000-06-05. 東方書店
バージョン：
権利関係：



自由間接話法研究の新成果

中里見 敬

二年ほど前、アメリカのミシガン大学で研修中に、イギリスで文体論を専攻した大学院生と知りあった。彼女はアメリカの大学や学会で文体論がほとんど取り上げられない状況を大変いぶかしがっていた。アメリカでの文学研究が文体論のような細かい手続きを嫌って、現在のように理論的先鋭さを競うようになったのにはいくつか理由があると思う。アジア研究のような比較的マイナーな分野では、政治学、法律学、経済学、経営学、社会学、人類学、教育学、哲学、歴史学、美術史、言語学、アジア言語文化といった学科から、中国を研究対象とする人々を結集して、中国研究センターといったインター・ディスプレインを標榜する地域別の研究組織が活動している。このような場ではとりわけ、個々の専門分野におけ

る技術的な議論よりも、他分野の研究者とも共有し共感できる理論的な話題が期待される。人文・社会科学、ときには自然科学の研究者までもが一同に会する機会が頻繁に設定されるアメリカの大学コミュニティにおいて、例えばフーコーが好んで引用されるのはきわめて自然な成り行きだといえよう。

先のイギリス人大学院生がこうしたアメリカの状況に違和感を表明したように、イギリスの文学研究はやや様子が違うようだ。本書の著者・申丹氏は、イギリスのエジンバラ大学で博士号を取得し、現在、四十一才の若さで北京大学英语語言文学系教授、博士生导师をつとめている。本書は、「上篇 叙述学理論評析」、「中篇 文体学理論評析」、「下篇 叙述学与小説文体学的重合面」の三篇、全十章か

申丹著

叙述学与小説文体学研究



1998年
北京大学出版社 [2200円]

らなり、欧米における物語論と文体論の理論的到達を整理したうえで、著者独自の観点から物語論と文体論を架橋する試みであり、さらに「第十章 人物話語的 不同表達形式及其功能」においては文体論を中国語に適用している。上篇と中篇は、物語論と文体論の流派・学派とその展開を啓蒙的に詳述する内容である。しかし、特に物語論の紹介においては、ジュネットを捨ててトドロフを取るなど、理論の歴史的発展を無視した恣意的選択がめだつ。また、物語論が記号論に代表される言語論的転回 (Linguistic Turn) の帰結であったにもかかわらず、著者の言語観・文学観が、ことばに先立って存在する実体II物語内容を無条件に受け入

れる実体主義であることは、評者の最も危惧する点である。このような疑問は別稿で論じたので、ここでは触れない。

著者も指摘するように、文体論にはいくつかの流派がある。その中で、言語論的転回を引き受け、ことばによる表象の機構にメスを入れたのがジュネットやミケ・バル、アン・バンフィールドらの研究である。アリストテレスやプラトンの時代から修辞学の名のもとで行われていた作中人物のセリフの研究は、二十世紀に至って、語り手による地の文と作中人物によるセリフが渾然一体化する自由間接話法の発見により、近代小説の表現特徴を言語面から明らかにしたのだった。しかし、中国の文学研究においては、動

詞の形態をはじめとする言語の違いだけでなく、そもそも西欧文学の「近代」と中国文学の「近代」とが共通の問題設定で論じられるはずがないというナイーブな先入観もあつてか、自由間接話法の問題は語学的にも文学的にもほとんど取り上げられることがなかった。

しかし、近代は交通と翻訳の時代であり、文学の流通も同時化し一体化した。その結果、前近代と近代とは、物語の「真実らしさ」に質的な変化が生じているように思う。それまで歴史や作者や語り手（実在する講談の語り手であるか、擬制的な語り手であるかを問わない）といった外部に信憑性をゆだねていた物語が、近代以降では作中人物自身のなまの声と

感情リアリティ＝真情に読者が「真実性」を感じるように変化した。この一点からも、西欧文学と中国文学の近代は共通性を見いだしうるように思う。そのような変化を可能にしたのが、自由間接話法をはじめとする表現の変革だったのである。

中国語の自由間接話法に対する著者の研究は、上述のような評者の関心に応えるものである。そこで本稿ではこの問題にしばって論じ、書評に代えることとしたい。

本書ではまず、中国語においては動詞が時制を表示しないだけでなく、さらに主語が省略されることの多いことに注目して、直接話法とも間接話法とも解釈可能な「両可型」が存在することを主張し

ている。例えば、以下のような文である。

①他猶豫了一下。看来搞錯了。
英語を例に後半部分を考えてみると、自由直接話法ならば、

I seem to be wrong.

のように、動詞は現在形のまま、人称は一人称となる。これが自由間接話法ならば、

He seemed to be wrong.

のように、時制の一致により動詞は過去形となり、人称は三人称となる。英語などでは、動詞の時制と人称がつねに弁別基準として、直接／間接の区別と連動している。ところが、中国語ではそもそも時制や人称が話法の形式に非関与であるのだから、著者のように「両可型」と主張することは折衷案として以上の意義を見いだしたい。著者はさらに進んで、次のように伝達部を伴ったものも「両可型」に含める。

②他猶豫了一下。他對自己說：看来搞錯了。

評者の考えでは、中国語においては伝達部の有無こそが優先的な分類基準とさ

れるべきで、直接／間接の区別は副次的なものにすぎない。「両可型」というあいまいな言い方は、西欧諸語の自由間接話法がもたらす文体的効果が、実は中国語においてはむしろ直接話法に由来する自由形式（伝達部の省略されたもの）にこそ本来的に認められるという、この問題の核心を糊塗する恐れがある。この点について例を挙げて説明しよう。

③他猶豫了一下。他看来搞錯了。

この文は、間接話法「他對自己說他看来搞錯了。」から、伝達部「他對自己說」を取り去ったもので、典型的な自由間接話法の形式だといえる。ところが、人称代名詞が「他」であるために、中国語としてのこの文は、語り手「我」が第三者の作中人物「他」について語っているように感じられる。西欧諸語の自由間接話法の場合、その効果として語り手と作中人物の声の融合が認められる。ところが、中国語の場合、ここに作中人物の声を感じ取るためには人称代名詞「他」がいかに不自然で、そのためにいわゆる自由間接話法の文体的効果を認めることは困

難である。

それに対して、

④他猶豫了一下。我看来搞錯了。

のように、直接話法「他對自己說：我看来搞錯了。」の伝達部を省略した自由直接話法の形式こそが、中国語においては語りの地の文に作中人物の声を融合させる最も自然な形式であるように思う。そして、これと同等の効果を發揮するのが、上掲した主語の省略された無人称の文①である。したがって、①は自由間接話法から主語「他」の省略されたものに見えるよりは、自由直接話法の主語「我」が脱落したものととらえる方が、中国語の文体的効果の点から説得的であると考える。

西欧の自由間接話法に相当する中国語の形式は、次のようにまとめられるだろう。③は三人称の使用という西欧語との形式的にもかわらず、語り手と作中人物の声が融合する文体的効果は一般に認められない。逆に、一人称の④や無人称の①が、西欧の自由間接話法と同様の効果を与える。したがって、中国語に

おいては、自由間接話法という名称よりも、例えば劉禾 (Lydia H. Liu) が使う「自由転述体」や、ロシア語文法の「擬似直接話法」または「準直接話法」などの方がより適切だといえよう。なお、本書では言及されていないけれども、劉禾には自由転述体に関する注目すべき論考があることを指摘しておく。

次に、中国語においては「従属節意識」が弱いという著者の指摘はきわめて説得的で重要である。例えば英語の間接話法の場合、従属節は関係代名詞 *that* に導かれる。従属節が複数連なるときには、二番目以降の節も *that* に伴われる。それに対して、中国語ではそのようなことがないために、二番目以降の従属節は、それが従属節であるとの標識を持たず、あたかも伝達部を失った自由転述体と同じかたちを取るのである。その結果、従属節は語り手の支配から解放され、作中人物の声を響かせることができわめて自然に実現されるのである。著者の引く例を一つだけあげておく。

棣華又想起天已經黑了，他此時不知被

擠在那里？今天晚上，又不知睡在那里？（呉趺人『恨海』）

伝達部「棣華又想起」以下の節が、伝達動詞および地の文から独立性を増し、第二節の「此時」に続いて、第三節では「今天晚上」という作中人物の属する時間のダイクシスに取って代わられている。

以上、かなり細部にわたって著者の議論に対してコメントを加えてきた。最後に、言語研究と文学研究にまたがる文体的課題には、このような言語的特徴がどのような意味を持つかを論じることも含まれるはずだ。著者は欧米の批評理論が社会的政治的関心に傾斜していることを批判して、文学研究が政治に従属した中国の文化大革命の轍を踏むものだという。しかし、ことばは単なる現実の反映ではなく、逆にあらゆるものはことばによって構築されるという立場にたてば、ことばによる表象がジェンダーや植民地後の社会的差別を固定し助長していることに異議を唱えることは、政治に従属するどころか、言語・文学研究の立場からの正当なコミットメントといふべきである。

ここでも言語論的転回を共有しない著者の態度が露呈しているように思う。

(1) 「叙述学与文体学在中国的受容——評申丹《叙述学与小说文体学研究》」(中里見敬、『言語科学』三五、九州大学言語文化部言語研究会、二〇〇〇年二月)

(2) ロシア語では、間接話法でも時制の一致は必要ない。直接話法/間接話法の対立が英独仏語ほど明確でないロシア語は、中国語の問題を考える際に示唆的である。なお、ロシア語に関しては、山形大学の相沢直樹氏よりご教示を得た。

(3) 『語際書写——現代思想史写作批判綱要』(劉禾著、香港：天地圖書有限公司、一九九七年)第四章。内容に大きな異なるある英語版は、Lydia H. Liu, *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity—China, 1900–1937* (Stanford: Stanford University Press, 1995). See Chapter 4. (九州大学)